様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０８６７

研究課題名（和文）対人恐怖症（社交不安障害）の心理発達的要因を探る：嫌悪判断を中心に

研究課題名（英文）Interpretation bias which enhance and maintain Taijin-Kyofusho (social anxiety disorder): A developmental study

研究代表者
相澤　直樹（Aizawa, Naoki）

神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授

研究者番号：１０３３５４０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，対人恐怖症（社交不安障害）に結びつく児童期の対人不安（シャイネス）に着目し，その発生と維持に関わる心理発達的要因としての対人場面における認知の偏りとの関連を検討した。児童期後期の小学生３９３名を対象に，児童用シャイネス尺度と他者意図判断尺度を含む質問紙調査を実施した。その結果，シャイネス傾向に一貫する発達的変化は見られなかったものの，他者意図の肯定的解釈が発達に低下するとともに，シャイネス高群と低群でその時期に違いがあることが示唆された。同時に，自己を意識して不安になる自意識シャイネスが加齢により高まる傾向もみられた。以上の結果を心理発達的観点から検討するとともに今後の展望を論じた。

研究成果の概要（英文）：The present study examined the relationship between late-childhood shyness (social anxiety) and interpretation bias in the interpersonal situations. A shyness scale for children and adolescents, a hypothesized situation method which measured positive interpretation bias in interpersonal situations, and a shyness type scale were administered to 393 children ranging from 4th to 6th grade. Results indicated that shyness was almost unchanging but that positive interpretation decreased remarkably during late childhood while high shyness children experienced such decease later than low shyness children. Self-conscious shyness was raised during late childhood. Implications for understanding developmental change of social anxiety and for further investigation were discussed.

研究分野：臨床心理学

キーワード：対人恐怖症　社交不安障害　対人関係　臨床心理学　発達心理学

１．研究開始当初の背景

(1) 従来我が国において、対人場面における不安や緊張等の精神的苦痛とそれによる対人場面の回避傾向は、ひろく対人恐怖症として精神心理臨床の分野を中心に長年にわたり研究されてきた。1980 年代以降、欧米圏において同様の精神疾患が社交不安障害の名称のもと急速に注目を集めている。最近の大規模な疫学的調査では、うつ病やアルコール乱用、特定の恐怖症と並んでもっとも高頻度にみられる精神障害のひとつに挙げられている。また、これまでにいくつかの社交不安障害の発生と維持に関わる認知モデルが提起されている。

(2) 近年になり、とくに子どもの社交不安に注目が集まるようになった。いくつかの縦断的研究により、人生早期に対人関係上の不安や抑制を示す子どもが。成人期以降の対人関係や結婚の困難さ、経済状況の低さ、社会的活動の狭さなどを示すことが報告された。また、子どもの社交不安障害においても成人のそれと同様の認知モデルを支持する研究が発表された。以上の研究結果を受けて、欧米圏では子どもを対象とした社交不安障害の認知行動療法などが開発されている。しかしながら、従来の乳幼児の人みしりや児童のシャイネスなどに関する研究に示されるように、子どもの対人関係上の不安や緊張は発達的な要因と密接に関連するものである。しかしながら、社交不安障害、ならびに、それを維持する認知処理について発達的推移を検討した研究はいまだに少ない。

２．研究の目的

(1) 子ども自身の対人関係、ならびに、思春期青年期以降の社会的適応を考慮しても、子どもの社交不安、ならびに、それに関連する認知処理の発達的推移、ないしは、それらの関連を検討することは大変有意義な取り組みであると考えられる。そこで、本研究では、対人恐怖症の臨床事例に基づく認知要因の検討を踏まえ、児童期後期の社交不安（シャイネス）と対人場面における認知判断傾向に焦点を当てて、それらの発達的な推移と関連について検討することを目指した。

３．研究の方法

(1)30 代男性の対人恐怖症（視線恐怖）の事例検討を通じて、対人恐怖症の発生と維持に関わる認知の偏りの要因について検討した。

(2)対人恐怖症や社交不安障害、ならびに、子どもの対人恐怖症、社交不安障害に関する国内外の文献資料、および、子どもの認知発達に関する文献資料を収集整理するとともに、心理学関連諸学会において関連する研究者と情報交換を行い、本研究課題に関わる最新の研究知見を収集整理した。

(3)以上の研究成果を踏まえ、児童期後期の小学生を対象に、社交不安（シャイネス）と対人場面における認知判断傾向、ならびに、シャイネス・タイプの発達的変化、ならびに、それらの関連性を検討するための質問紙調査研究を実施した。

①調査協力者は、小学 4 年生 85 名、5 年生 152 名、6 年生 155 名の計 392 名（男子 194 名、女子 198 名）であった。調査は、2013 年 12 月から 2014 年 1 月にかけて、A 地方の公立小学校の協力の下、担任教諭を通じて質問紙を調査協力者に配付し、記入を求めた。なお、調査の実施に当たっては神戸大学大学院人間発達環境学研究科の研究倫理審査委員会の承認を得た。

②児童の社交不安（シャイネス）の測定には児童・思春期シャイネス尺度（6 項目）を用いた。対人場面の認知判断傾向の測定については、場面想定法を用いて対人場面における他者の意図の肯定的な認知判断を測定した。対人関係における体験について主人公が肯定的な認知解釈を行う場面を４場面提示し、それぞれの解釈について“正しいと思うか”、“気持ちがわかるか”を回答させた（図 1)。シャイネス・タイプの測定については、恐怖シャイネスと自意識シャイネスに該当する場面を提示し、「いずれが最も恥ずかしいと思うか」を選択させる手法を用いた。

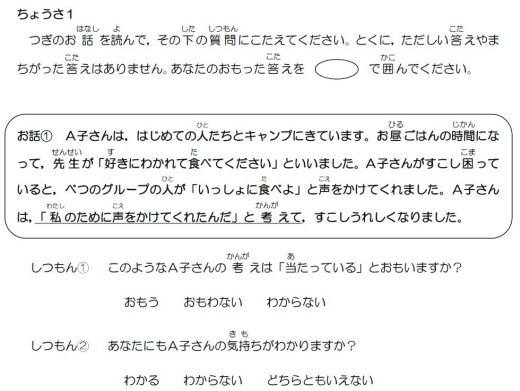

図１

４．研究成果

(1)30 代男性の対人恐怖症（視線恐怖）の症例を検討した結果、葛藤回避傾向と他者との融合合一的な体験様式の特徴がみられた。このことにより、内面的な気分感情や自分自身への気持ちが他者の体験に位置づけられやすく、対人場面の認知に偏りが生じやすいことが示された。

(2)子どもの対人恐怖症や社交不安障害、ならびに、子どもの認知発達に関する国内外の先行知見を収集整理した。シャイネス、引っ込み思案、行動抑制など関連する行動特性を併せて検討した結果、親や家族の要因として、親の社交不安障害や養育態度、不安傾向や信念、親の認知様式との関連、父親の影響との関連、また、仲間関係の要因としては、仲間関係の少なさとソーシャル・スキルの不足、いじめや仲間はずれの体験、親友の特徴や友人関係の質との関連に関する研究がなされていることが示された。

(3)小学生を対象とした質問紙調査の結果、以下のような知見が得られた。

①社交不安（シャイネス）の発達的変化を検討するため、児童・思春期シャイネス尺度の下位尺度である不安傾向と消極傾向について、学年と性別の 2 要因分散分析を実施した。その結果、不安傾向は、性別と学年の交互作用が有意となり、女子で 6 年生で有意な低下

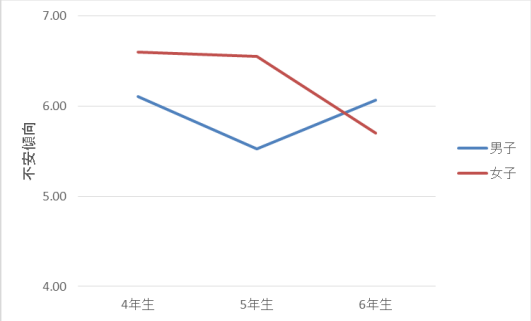

図 2

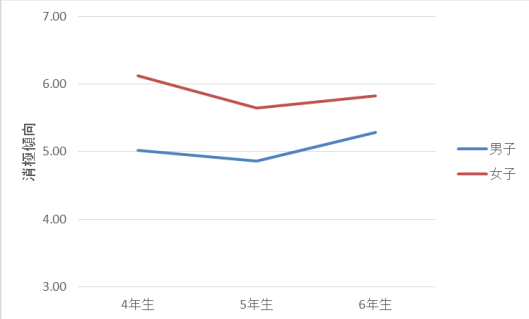

図 3

がみられた（図 2）。消極傾向では、性別の差が有意となり、女子の方が男子よりも高い不安傾向を示すことが示唆されたが、学年による有意さは見られなかった（図 3）。以上の結果から、不安傾向の一部で学年による差がみられたが、それ以外ではほとんど発達による変化は見られなかった。先行研究では、社交不安（シャイネス）の加齢による変化に一貫性がみられにくいことが報告されており、本研究の知見と一致するものと言える。このことから、社交不安（シャイネス）の発達的な変化の検討には、質や側面による違いを考慮する必要があるものと考えられた。

②対人場面における肯定的な認知判断の発達的変化を検討するため、肯定的認知判断の選択数に対するシャイネス高低と学年の 2 要因分散分析を実施した。その結果、「正しいと思う」の選択数については、シャイネス高低と学年の交互作用が有意となり、シャイネス低群では 4 年生から 5 年生にかけて肯定的認知の低下がみられるのに対して、シャイネス高群では 5 年生から 6 年生にかけて肯定的認知の低下がみられた（図 4）。「気持ちがわかる」の選択数についても交互作用が有意となり、同様に、シャイネス低群では 4 年生から 5 年生にかけて肯定的認知の有意な低下がみられたのに対し、シャイネス高群では 5 年生から 6 年生にかけて有意な低下が示された（図 5）。一方、非肯定的判断を意味する「正しいと思わない」についても有意な交互作用がみられ、シャイネス高群で 5 年生から 6 年生にかけて非肯定的判断が増加する傾向にあることが示された（図 6）。以上の結果から、対人場面の肯定的な認知が学童期後期で低下する傾向が顕著に観察された。このような現象を報告する研究は国内外を問わずほとんど見られず、新たな知見であると考えられた。その主な原因としては、学童期後期における客観的な認知判断力の定着、ないしは、自意識の高まりによる否定的な認知判断傾向の高まりが考えられるが、今後の重要な研究課題であると考えられた。同時に、シャイネス高群と低群で、そのような肯定的認知の低下の時期にズレがみられる点もこれまでにない知見であると思われた。その背景には、シャイネス高群の対人関係や友人関係の少なさが影響していることが想定されたが、これも今後の検討の余地を残すものと考えられた。

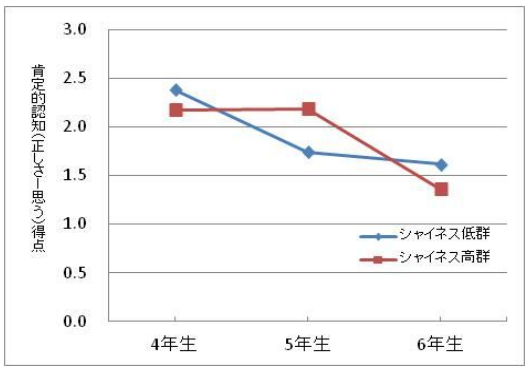

図 4

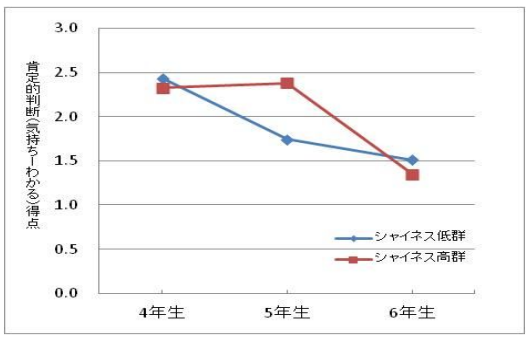

図 5

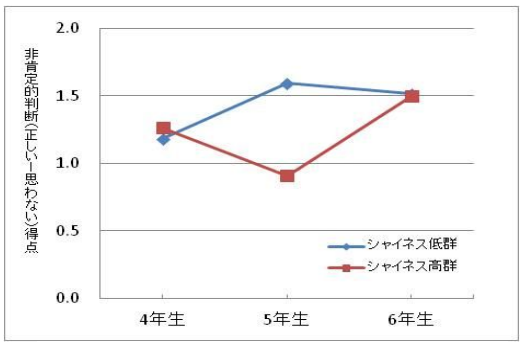

図 6

③シャイネス・タイプの発達的変化を検証するために、シャイネス場面選択と学年について出現頻度のχ二乗検定を実施した。その結果、「人前で歌を歌う」を最も恥ずかし場面と選択した子どもが 4 年生で少なく、6 年生で多いことが示唆された（図 7）。このことは、この場面に反映される自意識シャイネスが加齢により増加することを示唆するものと考えられた。また、シャイネス得点について、シャイネス・タイプと性別の 2 要因分散分析を実施したところ、不安傾向については場面選択と性別の主効果がともに有意となり、女子の方がより高い不安傾向を示すとともに、「人前で歌を歌う」を選択した人の方が「気に入らない服で人に会う」を選択した人よりもより高い不安傾向を示すことが検証された（図 8）。消極傾向については、性別の主効果のみ有意となり、女子の方が高い消極傾向を示すことが示唆された（図 9）。

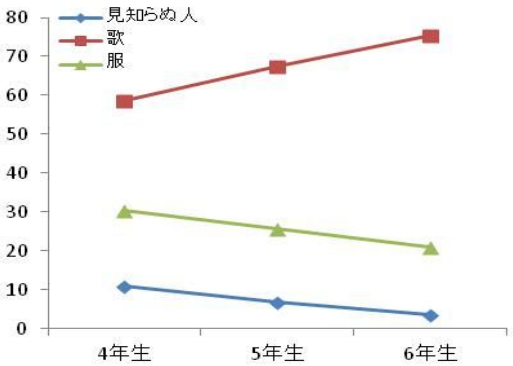

図 7

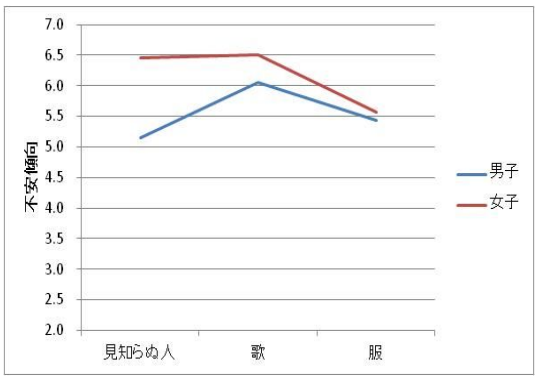

図 8

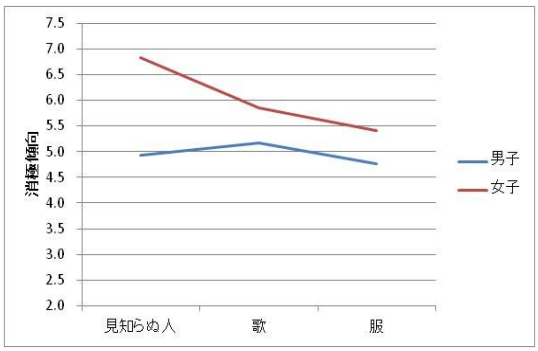

図 9

④以上のような調査研究により、社交不安（シャイネス）、対人場面における認知判断、シャイネス・タイプについて一定の発達的な推移が確認された。社交不安（シャイネス）とシャイネス・タイプに関する結果については、おおむね先行研究の知見に一致するものであった。一方、対人場面における肯定的な認知の加齢による低下や、シャイネス高低による低下時期の違いなどは、先行研究にない新ただ知見であると考えられた。このような現象が生じる理由や意義について、今後精力的な研究が求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

① 相澤　直樹、子どもの社交不安に関する心理発達的研究について：研究ノート、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、査読無、7 巻、2014、149-156
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81006277

② 相澤　直樹、山根　隆宏、児童期後期における社交不安（シャイネス）の発達的変化: 対人場面における他者の意図の判断との関連から、神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、査読有、8 巻、2015、67-75
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81008826

〔学会発表〕（計　３　件）

① 相澤　直樹、対人恐怖の心理構造－視線恐怖を主訴に来談した事例の面接経過を通じて、日本心理臨床学会第 31 回秋季大会、2012.9.15、愛知学院大学（愛知県）

② 相澤　直樹、山根　隆宏、学童期後期における対人不安（シャイネス）の発達的変化について－対人場面における他者の意図の判断との関連から、日本心理臨床学会第 33 回秋季大会、2014.8.24、パシフィコ横浜（神奈川県）

③ 相澤　直樹、山根　隆宏、学童期後期における対人不安（シャイネス）の発達的変化について（２）―シャイネス・タイプとの関連から、日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会、2014.10.5、山梨大学（山梨県）

〔図書〕（計　０　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０　件）

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
相澤　直樹（AIZAWA, Naoki）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
准教授

研究者番号：１０３３５４０８

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
山根　隆宏（YAMANE, Takahiro）
奈良女子大学・研究院生活環境科学系・助
教
研究者番号：６０６４４５２３